

人間知性のなす認識に個人差が 生じるのはなぜか

中 村 治

トマスは『命題論註解』において「⁽¹⁾魂の受動はものの類似であり万人において同一である」と述べている。任意のある「もの」res から魂が受けとる「魂の受動」passio animae はそのものの「類似」similitudo であり、誰においても同一であるとトマスは言うのである。しかしそれにもかかわらずそのものについて我々のなす認識に個人差があるということは明らかである。ではものから魂が受けとる受動はそのものの類似であり万人において同一でありながらそのものについて我々のなす認識に個人差が生じるのはなぜであろうか。以下においては認識が持っている構造の側面と認識者における諸条件の側面からこの問題についてトマスに即して考察してみたい。

I

1. ではまず先の引用箇所でもものの類似であり万人において同一であると言われている魂の受動とは何であろうか。それは「知性の懐念」conceptio intellectus のことであると思われる。というのは『命題論註解』の先の引用箇所のすぐ近くで「⁽²⁾魂の受動とはここでは知性の懐念のことである」とトマスは言っているからである。⁽³⁾では知性の懐念とは何であろうか。知性の懐念とは知性認識するという現実活動の結果である。⁽⁴⁾それ故知性の懐念とは何であるのかという問題について考えるために、次に我々においては知性認識するという現実活動はどのようにして生じるのかという問題について考えてみよう。

トマスによれば我々は「感覚」sensus と「想像」imaginatio によって個物を把握し、そしてそのようにして把握されたものを媒介として知性によってその個物を

知性認識するといふ⁽⁵⁾。では感覚はどのようにして個物を把握するのであろうか。

感覚は *communicatio corporis* なしにはその固有のはたらきを持たない。それ故感覚するということは魂だけの活動ではなく魂と身体との結合体の活動である。それ故魂の外にあるところの可感的なものが結合体へとあるものを原因するといふことは不都合ではないから、感覚することができる部分のはたらきは可感的なものの感覚への「印象づけ」*impressio* によって原因される⁽⁶⁾。従って感覚は可感的なものである個物が感覚に印象づけるという仕方⁽⁷⁾で個物を把握するのである。

ところでそのようなして生じた「現実態に従っての感覚」によって「表象力」*phantastica potentia* つまり「想像力」*imaginativa potentia* においてある種の運動が原因される。それが「表象」*phantasia* である。そして想像力はこの表象をもとにしてさらに複合し分割することによって個的なものの似像、つまり「表象像」*phantasma* を形づくる⁽⁹⁾。しかし表象像のつくられ方にはもう一つある。感覚からの情報が現存していなくても記憶力の内に保存されている記憶をもとにして想像力が複合し分割することによって表象像を形づくる⁽¹⁰⁾ことがあるからである。

では知性はそのような仕方⁽¹¹⁾で形づくられるところの「個的なものの類似たる表象」をどのようにして必要とするのであろうか。それは知性認識のための素材としてである⁽¹²⁾。実際、知性は *communicatio corporis* なしにはたらきを持つ。しかるに表象像は個的なものの類似であり身体器官において存在しているので人間知性が持っているのと同じ存在様態を持っていない。それ故表象像は可感的なものが感覚に印象づける⁽¹³⁾というような仕方⁽¹⁴⁾で自らの力によって知性に印象づける⁽¹⁵⁾ということ⁽¹⁵⁾をなし得ないからである。従って知性に受動的なはたらきしか認めないならば知性認識は生じ得ないことになろう。

では知性において能動的なはたらきをなすのは何か。それは「能動知性」*intellectus agens* である。そしてこの能動知性が表象像へと向き表象像において抽象するということから能動知性の力によって「可能知性」*intellectus possibilis* においてのもののある種の類似、つまり種の本性に関するかぎりにおいてものの類似であるところの「可知的形象」*species intelligibilis* が映るのである⁽¹⁴⁾。そして知性はこのようにして得られた可知的形象によって形づくられるとさらにそのものの何性やそのものについての判断を形づくり⁽¹⁵⁾うようになり、そのものを知性認識しうよう

になるのである。このようにして知性認識するという現実活動は我々において生じられると思われる。

それ故知性認識するという現実活動の結果たる知性の懐念とは何性の懐念と判断の懐念のことであろう。⁽¹⁶⁾ではものの類似であり万人において同一であると言われるところの知性の懐念とはどちらのことであろうか。それは何性の懐念ではないだろうか。実際、ものの類似であり万人において同一であると言われる知性の懐念は万人において同一であると言われるからには万人に誤ることなく懐念されねばならない。しかし我々の知性はものの何であるかに関しては決して欺かれぬが、ものについて判断することにおいてはしばしば欺かれると言われるからである。⁽¹⁷⁾

ではものの類似であるところの魂の受動つまり何性の懐念は万人において同一でありながらそのものについて我々のなす認識に個人差が生じるのはなぜであろうか。それはそのものからそのものの何性の懐念を得るとしてもそれだけでは我々はそのものを認識したことにはならないからである。実際『真理論』q. 1, a. 1cにおいて「認識は真理の結果である」*cognitio est veritatis effectus* と言われている。しかるに真理とは真なる判断の結果生じる「概念」*ratio* である。それ故我々はものからそのものの何性の懐念を得るとしても、さらにそのものについて真なる判断を形づくらなければそのものを認識したことにはならないのである。

しかし我々はものについて認識するためにはなぜそのものについて判断しなければならないのであろうか。我々は認識諸能力を通じてそのものの類似であり万人において同一であるところの何性の懐念を得ている。しかもその何性の懐念は認識諸能力が正常であるならば常にそのものの正しい類似であるはずである。それ故我々はそのものの何性の懐念を得る段階ですでにそのものを十分に認識しており、従ってそこからさらに偽への危険をおかしてまでそのものについて判断することなど不要ではないかとも思えるのである。実際、「認識は真理の結果である」と言われるが、真理とは「ものと知性との一致」*conformitas rei et intellectus*, あるいは「ものと知性との対等」*adaequatio rei et intellectus* のことである。⁽¹⁸⁾しかるに「一致」*conformitas* と言うからにはものの *forma* とそのものについて知性が形づくる *forma* つまり何性とが一致すると考える方がものの *forma* とそのものについて知性が形づくる判断とが一致すると考えるより自然的ではないであろう

か。それ故知性がものからそのものの類似たる何性の懐念を得る段階ですでにものと知性との間には真理、つまり「ものと知性との一致」という概念が成立して知性に認識が結果しているのであって、知性はそこからさらにわざわざそのものについて判断などする必要はないと思われるのである。

この問題を解く鍵は「真理とはものと知性との対等である」と言われる時の「対等」ということばにあると思われる。「真理とはものと知性との対等である」と言われるのであるから対等するのはものと知性とであろう。しかし「対等する」*adaequare* ということは「等しくなる」*aequare* ということと同じではない。それ故同じものが同じものに対等されるのではなく、異なるものどもに等しさが属しているのである。従って知性ともものが対等するためには知性ともとは異なるものでなければならず、かつ知性ともとの間に等しさが気づかれねばならない。知性ともものが異なるものでなければならぬというのは知性もある意味ではものであるため、知性がものであるかぎりにおいては知性はものと異ならないとも言えるからであろう。では知性がものと異なるものになり、かつ知性ともとの間に等しさが気づかれるのはいつか。それは知性が「魂の外にあるもの」*res extra animam* が持っていないある固有のもの——しかもその固有のものと魂の外にあるものとの間で対等が気づかれうる固有のもの——を持ちはじめるときである。ではそのような「知性に固有のもの」とは何であるのか。トマスはそれは複合し分割する知性のなす判断であると言う。⁽¹⁹⁾ 実際、ものどもの何性を形づくる知性の形づくる何性は魂の外に存在しているものの類似にすぎず、それ故知性はあるものの何性を形づくるとしてもその段階ではまだ本当の意味でそのものと異なる何かとなっていない。しかるに把握されたものについて知性が判断をはじめるとき、知性のその判断自身ものにおいては見出されないところのある種の「知性に固有のもの」であるため、知性は本当の意味でそのものと異なる何かとなるのである。それ故知性がものと対等するのはやはり知性がそのものについて真なる判断をなす時である。従って認識も知性がものについて真なる判断をなす時はじめて知性に結果してくるのである。ものの類似であり万人において同一であるところの何性の懐念を我々はものから誤ることなく受けとることができるのにさらにそのものについて判断しなければならないのは、そうしないと我々はそのものを認識することができないからなのである。

それ故魂の受動はものの類似であり万人において同一でありながらそのものについて我々のなす認識に個人差が出るのはなぜかという先の我々の疑問には一応次のように答えることができるであろう。魂の受動はものの類似であり万人において同一であるということと我々がそのものについてなす認識に個人差が生じるということとは矛盾することではない。我々はものの類似であり万人において同一である魂の受動を得るとしてもその段階ではまだそのものを認識していない。我々はそのものについて真なる判断を形づくる時はじめてそのものを認識するのである。それ故我々はあるものの類似であり万人において同一である魂の受動を持っているにもかかわらずそのものについて異なる認識を持ちうるのである。

ここで「一応」と保留をつけたのは「もし一度の認識に問題を限定するならば」という条件がつくからである。しかし我々の知性はものについての一度の真なる判断だけではそのものについての完全な認識を得ることができない。我々の知性は最初はものについての不明瞭な認識を得、しかる後にその不明瞭な認識を徐々に明瞭にしていくのである。それ故同一のものについて我々の知性のなす認識に個人差が生じることの原因がここにもあるように思われる。それ故その原因を次にこの側面からも考察していくことにしよう。

2. 我々の知性は可能態から現実態へと進んでいく。⁽²¹⁾しかるに可能態から現実態へと進むところのものは完全な現実態に達するよりも先に可能態と現実態との中間であるところの完成されていない現実態へと達する。ところで知性がそこへと達するところの完全な現実態とは完全な知識であり、それによってものは判明に限定的に認識される。他方、知性がそこへと達するところの完成されていない現実態とは不完全な知識であり、それによってものは判明ではなくある種の混乱のもとに知られる。⁽²²⁾というのはある意味では現実態において認識されある意味では可能態において認識されるというようにして認識されるからである。それ故我々の知性は最初からもものについての判明な認識を得るわけではない。我々の知性は最初はものについてのある種の混乱した認識を得、しかる後にそのものをだんだん判明に認識していくのである。しかもものの認識における我々の知性の可能態から現実態へのこの進行は無限に続き、我々の知性は決して完全な現実態にたどりつくことはないであろう。実際、我々の知性によって第一義的に知性認識されるところのものとは可知的

形象がその類似であるところの「もの」res⁽²³⁾である。しかるにトマスにおいてはものとは個物のことである。しかし我々の知性は個物をそれが個物であるかぎりにおいて⁽²⁴⁾は認識できず、個物を普遍の次元において限定して認識できるのみである。⁽²⁵⁾それ故我々の知性はいかに努力してもものを完全には認識できないからである。しかしなぜ我々の知性は個物をそれが個物であるかぎりにおいては認識できないのかというそれは次のような理由による。実際、いかなるはたらきであれはたらきははたらきの根源であるところの「能動者の形相」の条件に従わねばならない。しかるに認識力がそれによって形づくられるところの「認識されたものの類似」は現実態に従っての認識の根源である。それ故いかなる認識であれ認識者の内にある「認識されたものの類似」の様態に従ってあるのでなければならない。しかるに我々の内にあるところの「認識されたものの類似」は質料と個体化の諸根源であるところの質料的諸条件とから分離されたものとして受けとられる。⁽²⁶⁾それ故この理由により我々の知性は感覚を通じてあらかじめ認識されているところの個物をそれが個物であるかぎりにおいては認識できず、その個物を普遍の次元において認識できるのみとなるのである。⁽²⁷⁾かくしてそれ故たとえ同一のものについて認識するとしてもそのものについての我々の経験の多少に応じ、つまりそのものの諸根源や諸要素を判明に区分したり⁽²⁸⁾そのものの本質をとりかこんでいる諸固有性や諸付帯性や諸関係を知性認識していく⁽²⁹⁾ことに従っての真なる判断の積み重ね具合に応じて我々の間にはそのものについての認識において様々な個人差が生じてくるし、その個人差は無限に多様にありうることにもなるのである。

従ってこのように見てくるならば、魂の受動はものの類似であり万人において同一であるにもかかわらずそのものについて我々のなす認識に個人差が生じるのは我々のなす認識が持っている構造に原因があると言えるのではないだろうか。我々においては感覚や想像力や記憶力のはたらきによって形づくられる表象像から知性が可知的形象を抽象することによって知性認識ははじまる。そしてそのようにして可能知性において可知的形象が映ると「ものの何性を形づくる知性」はさらにそのものの何性を形づくろうようになる。しかしそのようにして形づくられた何性はそのものの類似であり万人において同一であるとしても我々の知性はその段階ではまだそのものを認識していない。我々の知性がそのものを認識するのは「複合し分割

する知性」がそのものについて真なる判断をさらに形づくる時なのである。しかも我々の知性は一度の認識だけではそのものを完全には認識できない。我々の知性はものについてのある種の混乱した認識を最初は得、しかる後にそのものをだんだん判明に認識していくのである。しかも我々の知性はそのものを完全には認識しつけない。それ故我々においては認識はこのような仕組みで成立し、明晰にされていき、しかも完全には明晰にされえないのであるから、従ってたとえ魂の受動はもの類似であり万人において同一であるとしてもそのものについて我々のなす認識には様々なそして無限に多くの個人差が生じうるようになると思われるのである。

II

3. さて我々において認識がこのような仕組みで成立しそして明晰にされていくのであるとするならば、認識の程度に個人差が生じてくることの原因として我々はさらに認識者における諸条件を考えることができるであろう。

一つは知性認識することにかかわる諸力の素質の良し悪しである。しかるに知性認識することにかかわる諸力としては知性自身と知性が自らのはたらきのために必要としているより下位の諸力、つまり「想像力」や「思考力」*virtus cogitativa* や「記憶力」などを考えることができるであろう。それ故たとえ同じものを認識するとしても知性や想像力や思考力や記憶力などの素質の良し悪しに応じて我々においてはそのものについて我々のなす認識の程度に個人差が生じてくると思われるのである。

しかしたとえ知性認識することにかかわる諸力の素質がすぐれているとしても我々はそれだけではそのものをより良く認識できない。というのはもしそれだけでより良く認識できるとするならば生まれつきよりすぐれた知性を持っている人、よりすぐれた想像力や思考力や記憶力などを持っている人が必ずよりよく認識することになってしまうであろうが、しかし事実はそのようではないということは明らかだからである。それ故認識者における条件として我々は認識するというはたらきにおける「訓練」*exercitium*⁽³¹⁾をさらにあげねばならないであろう。我々はいかに良い素質の知性や想像力や思考力や記憶力などを持っているとしてもそれらをそれぞれのはたらきにおいてよく訓練し、そうすることによって認識するためにより良い

「習態」*habitus* を形づくっておかなければそれらの素質を十分に活かすことはできず、従ってよりよく認識することもできないのである。

かくしてそれ故魂の受動はものの類似であり万人において同一であるにもかかわらずそのものについて我々のなす認識に個人差が生じるのはなぜかという先の我々の疑問には、我々において認識が持っている構造の側面と認識者における諸条件の側面からは以上のように答えることができるのではないであろうか。

註

- (1) *In I Periherm.*, lect. 2, nn. 19.
- (2) *ibid.*, lect. 2, nn. 15.
- (3) *conceptio intellectus* がなぜ *passio* と言われうるのかという問題に関しては *Sum. Theol.*, I, q. 79, a. 2c ; I—II, q. 22, a. 1c 参照。
- (4) *De verit.*, q. 4, a. 2c.
- (5) *Sum. Theol.*, I, q. 84, a. 7c.
- (6) *ibid.*, I, q. 84, a. 6c.
- (7) *In de an.*, III, lect. 6, nn. 667.
- (8) *ibid.*, III, lect. 6, nn. 659 ; *Sum. Theol.*, I, q. 84, a. 6, ad 2.
- (9) *Sum. Theol.*, I, q. 84, a. 6, ad 2.
- (10) *ibid.*, I, q. 84, a. 6, ad 2 ; q. 84, a. 7c ; q. 85, a. 2, ad 3.
- (11) *ibid.*, I, q. 84, a. 7, ad 2 ; q. 85, a. 1, ad 3.
- (12) *ibid.*, I, q. 84, a. 6c.
- (13) *ibid.*, I, q. 84, a. 6c ; q. 85, a. 1, ad 3.
- (14) *ibid.*, I, q. 14, a. 12c ; q. 85, a. 1, ad 3.
- (15) *ibid.*, I, q. 85, a. 2, ad 3 ; *De verit.*, q. 3, a. 2c.
- (16) *De verit.*, q. 4, a. 2c.
- (17) *Sum. Theol.*, I, q. 17, a. 3c.
- (18) *De verit.*, q. 1, a. 1c.
- (19) *ibid.*, q. 1, a. 3c.
- (20) *ibid.*, q. 1, a. 3c.
- (21) *Sum. Theol.*, I, q. 85, a. 3c ; q. 85, a. 5c.
- (22) *ibid.*, I, q. 85, a. 3c.
- (23) *ibid.*, I, q. 85, a. 2c.

- (24) *De verit.*, q. 1, a. 1c.
- (25) *ibid.*, q. 2, a. 6c.
- (26) *ibid.*, q. 2, a. 6c.
- (27) *ibid.*, q. 2, a. 6, ad 3.
- (28) *Sum. Theol.*, I, q. 85, a. 3c.
- (29) *ibid.*, I, q. 85, a. 5c.
- (30) *ibid.*, I, q. 85, a. 7c.
- (31) *ibid.*, I, q. 79, a. 4, ad 3.